



鹿児島県護憲平和 フォーラム情報

NO—138 2022.9.1

発行：鹿児島県護憲平和フォーラム Email:kenheiwa@bronze.ocn.ne.jp

連絡先：鹿児島市鴨池新町 5-7 TEL 099-252-8585 FAX099-258-4560

被爆 77 周年原水爆禁止世界大会特集号

核も戦争もない平和な 21 世紀に！

—被爆 77 周年原水爆禁止世界大会・(広島・長崎) 大会—



戦後 77 年、猛暑の夏、被爆 77 周年原水爆禁止世界大会が、福島・広島・長崎と相次いで行われました。鹿児島からは広島大会に野呂副事務局長。長崎大会に 5 名が参加しました。

長崎大会には、各構成組織に作成いただいた「折鶴」、入佐あつ子さん作成の毛糸の花束（77 束）を献納しました。集まったタオル等は例年同様に原爆医療施設に送付しました。

また、「馬毛島 FCLP 基地建設反対」「自衛隊鹿屋基地への米軍無人機配備反対」の取り組み報告を鹿児島から行いました。



折鶴を献納する鹿児島からの参加者

被爆 77 周年 原水爆禁止世界大会(広島・長崎)に参加して

副事務局長 野呂正和

【「核戦争」危機の中での開催】

2月 24 日始まったロシアのウクライナ侵攻。何とチェリノブイリを経験したウクライナのザポリージャ原発への攻撃。核の脅威が世界を駆け巡っています。7月 8 日狙撃された安倍元首相はこの機に乗じて「核シェアリング」、「台湾有事は日本の有事」を口にしていました。

コロナ感染で 3 年ぶりの対面での原水爆禁止世界大会が、広島と長崎で開催されました。

まさに世界大戦前夜とも、核兵器使用が迫ってくる中での開催は、私たち原水禁に集う者たちに危機感と平和構築の新たな段階に入っていることを実感させるものでした。

5 日の午後、折鶴平和行進にも参加し、核も戦争もない平和な 21 世紀を広島市民に訴えました。

【川内原発 20 年延長反対街宣をしながら広島・長崎へ】

役員会で広島大会への参加を確認し、私野呂一人が参加することになりました。新幹線などの移動はその時間と経費が空費されることから、街宣車でしかも下道路を走ることを表明。「川内原発 20 年延長は大変危険です～」。八代の市街地の直前では手を振ってくれる中年男性。そして熊本、飯塚、北九州、小郡泊、広島世界大会。下関泊、福岡、唐津、西海、長崎世界大会。島原口之津、天草牛深の 1300 km の行程となりました。

実は 2012 年の年越しに福島原発事故の実情を観るために 9 日間 4200 km の一人旅も経験していたので、今夏の広島大会参加への街宣活動はさほど重い決断ではありませんでした。せっかくだったので長崎まで足を伸ばしました。7月 23 日の「鹿児島を戦場にさせない県民の会」発足総会講演で来鹿した沖縄の山城博治さんからは「無茶はダメよ！」と忠告もいただきました。

【広島・長崎、2回の分科会での報告】

県護憲フォーラムの事務局長を以前 3 年間務めさせていただきましたが、分科会での報告は初めてでした。第 1 分科会「改憲と敵基地攻撃能力」だった。ジャーナリストの前田哲男さんは腰痛で欠席、急遽、名古屋学院大学の飯島慈明さんの講演。「地元の法律に従わないのは侵略だ」。日米地位協定は米国の今も続く日本侵略を思い知らされた。沖縄からの報告は平和センターの事務局長の岸本喬さん。まさに台湾有事の最前線になるだろう沖縄の、とりわけ与那国や宮古の住



民避難の困難さ（石垣の 5 万人を避難させるのに民間航空機 435 機 9.67 日）、辺野古基地が普天間の代替になり得ないこと、沖縄の負担軽減は米軍沖縄の全国展開に過ぎないと指摘されました。

鹿児島からの報告は、私が映像準備もしないまま参加したために、奄美・馬毛島・鹿屋の現状の口頭報告にとどまってしまいました。それでも 5 分も超過して 20 分報告。

長崎移動中の 7 日午前、磨島事務局長から「種子島がコロナで参加できない。第 1 分科会に再度報告を」の依頼あり、ほぼ徹夜で 15 分のビデオを急遽準備することとなりました。

【高校生徒と国際シンポジウム】

広島での「高校生平和大使活動報告」は映像を駆使した連帶の見事さを表現したものでした。長崎では 90 人の高校生が構成劇を披露しました。「高校生 1 万人署名」はノーベル平和賞にノミネートされていることも紹介され、鹿児島からの再度の参加が望まれます。

広島の国際シンポジウムはオンラインでしたが、私は会場に参加しました。英国からデイブ・ウェップさん、米国からはカロ・アキュア・オルベラさん、そして日本からは英語の堪能な秋葉忠利さん。ウクライナ侵攻や核兵器使用をどう止めるか意見交換されました。

日本国憲法の前文になるような、外交での核使用の停止が有効であること、秋葉さんに至っては「核を使ったら永遠に悪名にとどまることを突き付ける」、受け身でなく価値感の転換で取り組もうと呼びかけられました。



被爆 77 周年原水爆禁止世界大会・長崎大会に参加して

かごしまフォーラム 上野正美

午前 8 時に鹿児島を出発。午後 1 時半には長崎に到着。途中、5 時間の間同行の参加者松永さん（現役バスガイド）が、いろいろと案内をしてくれ、あつと言う間に着いた印象でした。開会式に臨んで印象に残ったのが、「高校生平和大使」でした。全国・九州の代表の方々が壇上に上がり（120 人）経過と決意を述べました。鹿児島ではなかなか見ない状況で、鹿児島からの参加が無いのは少し寂しい思いでした。「微力だけど、無力ではない」の言葉が強く印象に残りました。

私たちの任務は、若い世代（子や孫）に平和な社会、戦争は反対の運動を引き継ぎ、広めて行くことではないかと思いを強くしました。

2日目の分科会では「はだしのゲン」上映会に参加しました。映画の中で4人兄弟の中で長男のゲン役は私の時代に重ねて感じる所もありました。戦争中は「非国民」と呼ばれ（父が戦争反対という）家は戦争で焼き落され、父姉弟は亡くなり、母と2人になり、8月9日の原爆投下の際、ゲンはたまたまブロック塀の陰にいて生き残りました。今、ウクライナでの戦争がある中、あってはならない世の中の状況です。はだしのゲンの映画は初めて見ました。次回の原水禁大会は、別の方が参加して、一人でも多くの方に見て聞いてもらいたいと思います。3日目の閉会集会、平和行進、爆心地公園での千羽鶴の献納、そして黙祷を捧げました。

全体的に高齢者の参加が多く、戦後77年たった今、どうやって若者に繋げて行くかが課題と思います。

最後に、今大会に兄弟で参加することが出来、若い頃の活動を思い出しました。長崎も暑かったです。そうした中、鹿児島から長崎までの往復900キロメートルを一人で運転し、かつ全体を統率してくれた事務局長に感謝しています。

被爆77周年原水爆禁止世界大会・長崎大会に参加して

私鉄鹿児島交通労働組合 松永典子

私が初めて原水爆禁止世界大会のことを知ったのは、20年ほど前仕事で広島に行く際に佐々木禎子さんについて学んでいるときでした。佐々木さんはコーチゾンという薬代が高く充分な治療を受けられない状態で亡くなっています。ここで初めて原爆の被害にあわれた方が自己負担で治療を受けていたことを知りました。ではいつから被爆者の救済が始まったのだろうか？疑問がわきました。【1954年3月ビキニ環礁で日本のマグロ漁船「第五福竜丸」がアメリカの水爆実験で被曝、乗組員が放射線による健康障害で入院し半年後に一名が亡くなりこれをきっかけに原水爆禁止を求める活動が活発になり1955年第1回原水爆禁止世界大会の実現につながる。こうして広島長崎の原爆被害が世界に伝えられ1957年「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律案(原爆医療法)」が制定され被爆者の健康診断や医療が国により行われるようになる。これによりようやく本格的な被爆者援護が始まった。広島市HPより】

今回参加するにあたり真っ先に頭に浮かんだのは「あの被爆者救済の礎を築いた原水爆禁止世界大会に参加できる」という喜びでした。しかし参加しているうちに、広島長崎だけではなく現在の核兵器や戦争、改憲や脱原発等様々なことを知り、自分がどれだけ無知であったか考えさせられました。無知は罪です。「私は知らなかった」では済まされない。被爆者の声を聞くことができる今だからこそ、もっと学んでいかなければならぬと思います。

二日目の分科会「平和と核廃絶、改憲と敵基地攻撃能力」では、オーストラリア本土を攻撃したのは日本だけで、オーストラリアにとっては第2次世界大戦とは主に日本との戦いであることやシンガポールの博物館では、日本軍が赤ちゃんを銃剣で突き刺す行為をしたとも記録があるそうです。二度と日本が戦争加害国にならないように憲法を守っていく

必要があります。また今回初めて高校生平和大使の活動を知りました。微力だけれど無力ではない。若い力が少しづつ広まっていることに感動しました。

今回心に残った言葉があります。「何にもしなければゼロになる。少しでもいいから語り

継いでほしい。」バスガイドという職業柄広島長崎へ行くとき当時の話を案内することができます。これからはこの経験を活かし今まで以上にしっかりと伝えて参りたいと思います。

最後になりますが原水禁世界大会の運営スタッフや平和運動センターの皆様、貴重な経験をありがとうございました。

被爆77周年原水爆禁止世界大会・長崎大会に参加して

かごしまフォーラム 上野 忠美

大阪で働いていた頃の広島大会以来。40数年ぶり初めての長崎大会に参加させていただきました。開会総会では、海外ゲストのスピーチを聞き、広島・長崎だけでなく、世界各国でも多くの人が苦しんでいるのを知りました。「原爆許すまじ」のDVDは、原爆の惨状・悲惨さを目の当たりにして、「核も戦争も無い」平和な世界を作る運動に更に取り組む重要性を感じました。

分科会の「ヒバクシャ～ヒバクシャから若い世代に」では、高校生をはじめとして会場に入りきれない程多くの参加者の中で、「被爆体験者の体験談」を聞き、原水爆の悲惨さや何十年も続く苦しさや影響があることに恐れを再認識しました。高校生平和大使の報告では、若い世代で6,000人余りの平和大使がいると聞き、さらに多くの若い世代にどう伝えていくのかが、重要な活動だと感じました。中でも「微力だけれど無力ではない」というスローガンに感動を覚えました。被爆者・経験者が84歳過ぎていると聞き、今後の平和活動を若い世代に伝えていくかが大切だと感じました。

平和活動支援センター所長の平野さんの講演の中で、何故広島・長崎に原爆が投下されたのかについて、「軍事施設があった」からと推測されるとの報告を聞き、鹿児島でも奄美や馬毛島・鹿屋基地でも、紛争が始まれば一番に倣われる可能性があるという怖さを感じ、基地反対活動の強化の必要性を感じました。

今回参加して、私の父（生きていれば97歳）も長崎に軍事施設に銃の弾薬作りに行き、身体を壊して鹿児島に帰って来てから原爆が投下されたと聞いたことを思い出しました。その時、もし身体を壊さなかったら、父も被爆者になり私も被爆二世になっていた可能性もあります。

今回参加して更なる核の怖さや、若い世代への引継ぎの大切さを実感しました。そして、現政権の対応・立場には憤りを感じ、対話からの平和解決を強く望みたいと思います。

これからも、「永久に核も戦争も無い平和な社会」を作る活動に微力ながら参加していきたいと思います。